19 世紀フランスにおける女性ダンサー表象に関する研究
―女性向けモード誌に着目して

丹羽　晶子

本論文は、19 世紀フランスの女性向けモード誌に表象された女性ダンサー像の特徴を精査し、同時期に刊行された他の新聞・雑誌における表象との比較を通して、女性読者に向けて提示されていた女性ダンサー像を明らかにすることを目的としている。

19 世紀のバレエは、「女性について女性が演じる男性のための芸術」(Garafola, 1997:4)という言葉に集約されるように、主題や演者は女性、受け手は男性という構図があった。しかし、当時のオペラ座に関する資料からは、女性もバレエを鑑賞していたことが確認できる。19 世紀のバレエ、特に女性ダンサー表象に関する先行研究の多くは、主たる読者を男性と想定した新聞・雑誌に掲載されたバレエ評から得た言説に基づいたもので、当時の女性に向けて、女性ダンサーがどのように表象されていたのかという視点が抜け落ちている点が注目される。したがって、当時の女性に向けた女性ダンサー表象を検討するため、女性を読者対象として刊行された 19 世紀のモード誌『シルフィード誌』*La Sylphide :journal de modes, de littérature, de théâtres et de musique*（1839-73）及び同時期に刊行された一般向けの新聞・雑誌 4 紙／誌に掲載されたバレエ評を中心に考察を進めた。

第一章では、19 世紀の女性を取り巻くジェンダー規範、身体規範、表象領域における女性の身体について概観した。19 世紀は、男女の厳格なジェンダー規範が存在しており、女性は男性に守られるべき性として良き妻、母親になることが望まれていたことが確認された。しかし、19 世紀後半以降開始された女子教育改革を契機として、知識を備え、自ら外に出て働く女性が登場し、これまでの社会の中での女性の立場や役割への認識が変化していったと考えられる。当時の身体観については、カトリックの教えが影響を与えており、女性たちは、身体の抑圧と純潔の維持に重点が置かれた身体規範に基づき、女性の美しさの構成要素の 1 つと考えられていた優雅さの獲得を目指していたことが示された。19 世紀の表象領域における女性の身体は、身体性の希薄な「天使的女性」と、官能的で身体性を強く感じさせる「悪魔的女性」の 2 つの異なる表象への分類が確認された。

第二章では、1840 年代の『シルフィード誌』の女性ダンサー表象の特徴について検討した。同誌上の女性ダンサーは、卓越した技術や身体部位以上に、優雅さに注目されていたことが確認された。同誌に表象されていた女性ダンサーは、非性的で天上的であり、優雅さを体現する女性として表象され、当時の女性たちが目指すべき美しさの規範として提示されていた可能性が示された。一方で、女性ダンサーが同時に内包している官能的で異国的な女性像に関しては、その性的な踊りやダンサーの官能性への言及を巧みに避けていることが確認された。この点は、女性向けモード誌独自の視点として示された。

第三章では、女性ダンサーと同様に、オペラ座で活躍した女性歌手も検討の範囲に加え、『シルフィード誌』上での女性歌手と女性ダンサーの描写の違いを検討した。女性歌手は、外見への評価以上に、歌唱力や歌の技術への関心が確認された。一方、女性ダンサーは、前章で確認されたように、踊りの技術以上に、優雅さに着目しており、両者には、その評価視点に違いが認められた。19 世紀において、優雅さは、女性の身体的美しさに不可欠な要素であり、それを体現した存在として女性ダンサーを表象していた可能性が強いと考えられる。そのため、女性読者を想定した記事においてはバレエ評の中で特に注目され、女性ダンサーを評価する上で、重要な基準であったと考えられた。

第四章では、1850 年代以降のバレエの様相と、同時期の『シルフィード誌』のバレエや女性ダンサー表象について検討した。同時期のバレエでは、オペラ座における新作バレエの上演が減少し、バレエの衰退を象徴する側面を有していた男装した女性ダンサーの登用により、演出や作品の主題の変化などが示された。この状況下において、他紙／誌ではバレエ評が継続的に掲載されていた中、『シルフィード誌』のバレエ評は、掲載頻度が減少し、内容の軽薄化が確認された。また、同誌に表象される女性ダンサー表象に変化が認められ、天上的で優雅さを体現する女性像から、身体性を強く感じさせ、男性の性的欲望の対象としての女性描写へと描きかえられていることが確認された。同誌上での非芸術的で反宗教的な存在としての女性ダンサー描写は、男性に性的な目で見られる女性ダンサーという構図を意図的に強調し、バレエや女性ダンサーを、読者の女性には好ましくない対象として提示している可能性が示された。

以上より、19 世紀の女性向けモード誌の『シルフィード誌』における女性ダンサー表象について、時代を経てその表象が変化したことが明らかとなった。刊行当初、女性ダンサーを彷彿とさせる誌名および表紙を表出し、象徴的存在として表象するが、時代と共に、誌面から減少し、読者の女性が真似るべきではない女性ダンサー像へと描きかえられ、同誌がバレエと距離を置くようになった可能性が示された。つまり、女性向けモード誌にみる 19 世紀の女性ダンサー表象は、その時代の社会文化的通念や規範が詰め込まれたメディアとしてのモード誌によって、巧みに操作されたものであり、女性が受け取るにふさわしい表象であったと考察される。本研究により、女性に向けた 19 世紀の女性ダンサー表象は、男性に向けた表象とは異なる角度から提示され、文化と結び付いた表象であったことが明らかとなった。